

カウツキーに対する批判

「カウツキーの定義はこうである。

「帝国主義は高度に発達した産業資本主義の産物である。それは、そこにどんな民族が住んでいるかにかかわらず、ますます大きな農業地域をみずから併合し従属させようとする、あらゆる産業資本主義的民族の志向である。」

この定義はまったくどうにもならないものである。なぜなら、それは、一面的だからである。勝手に民族問題だけをとりだし(それは、そのもの自体としても、帝国主義との関係においても、きわめて重要であるにしても)、勝手に、しかもまちがって、それを他民族を併合する諸国の産業資本とだけ結びつけ、同じように勝手に、またまちがって農業地域の併合をとりだしているからである。」(148)

[つまり、生産から考えられるべき問題を、民族から考えている。]

ホブソンの帝国主義論

「新しい帝国主義が古い帝国主義と違うのは、第一に、新しい帝国主義は、一つの成長しつつある帝国の渴望のかわりに、それぞれの帝国が政治的拡張と商業的利益とにたいする同一の熱望にみちびかれている、競争しあういくつかの帝国の理論と実践におくことである。第二に、商業的利益のうえに、金融上の利益あるいは資本投下にかんする利益が支配していることである。」

カウツキー批判 2

「われわれは、カウツキーが、マルクス主義を擁護しつつけていると称しながら、実際には、とくに現代帝国主義の二つの「歴史的・具体的」特質、すなわち（１）いくつかの帝国主義（151）の競争と、（２）商人たいする金融業者の優位性を、より正しく考慮に入れているホブソンのような社会自由主義者と比較しても、一歩後退していることを見る。」（150—151）

カウツキー批判 3

「問題の本質は、カウツキーが帝国主義の政策をその経済から切り離してしまい、併合を金融資本によって「好んでもちいられる」政策として説明し、その政策を、同じ金融資本の基礎のうえで可能であるという他のブルジョア的政策と対置しているところである。」
(151)

カウツキー批判 4

「[カウツキー]は自分の反対論に、日和見主義者にとってもっとも気にならない、もっとも受け入れやすい形態をあたえている。彼は直接ドイツの聴衆に語りかけているが、それにもかかわらず、まさに最も重要な緊急なこと、たとえばエルザス・ロートリンゲンがドイツが併合したものであるということを、塗りつぶしている。カウツキーのこの「思想の偏向」を評価するために、例をあげてみよう。日本人がアメリカ人によ

るフィリピンの併合を非難したとしよう。これは併合一般への憎しみから生まれ、自分自身がフィリピンを併合したいという望みから生まれてくるのではない、と多くの人々は信じているだろうか[信じるだろうか]？併合に反対する日本人の「闘争」は、日本人が日本の朝鮮併合に反対して立ち上がり、日本人が日本からの朝鮮の分離の自由を要求した場合のみ、誠実で政治的に公明正大なものであると考えることができる、ということをも認めるべきではないだろうか？」